
森の国のアリス

甲斐仁

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

森の国のアリス

【Nコード】

N2341D

【作者名】

甲斐仁

【あらすじ】

そこは、日本の田舎。アリスは一人、森の中を続く一本道を歩いていた。アリスは森の奥に、一人の青年を見つける。その後を追いかけると……。可愛らしい少年の双子。ほのぼのとした、青年。落ち着いた渋いおじさま。ちょっと変な帽子青年。出会いが会いを呼ぶ、少し奇妙な世界へと迷い込んでしまう。そして自分のことを知るとき、アリスは…。

1、双子少年

ぽかぽかと暖かい陽射しの中、アリスは大きなバスケットを手に歩いていた。

日傘をさし、とんとんとリズムを取るように軽やかに歩いていく。ここは日本のド田舎。真夏の今そこで蝉がうるさく泣いている。アリスは今、丁度地元の森を抜ける最中だった。細く続く一本道を、うきうきと歩いていく。

アリスは、ふと足を止めた。

視界の端に、さらりと煌く何かが写ったからだ。

この森の中、なんだろう・・・と、少しだけ気になって、煌いた方へ顔をむけた。

「わぁ・・・」

そこには、一人の青年が立っていた。煌いて見えたのは、青年の濃い金色の髪だったようだ。

「だれかな・・・」

この近辺では、見たことがない。外人だろうか。

青年は、ふとアリスの視線に気づいた。

「貴様は・・・」

「・・・わぁ」

綺麗な、声。低く透き通るような、心地よい重低音だ。

しかも、その容姿は目を見張るものであり、それぞれのパーツがこれ以上ないほど整っている。

　　睫、長いなあ

「かつこいい、ひと」

「・・・」

青年は、少しだけ目を細めると、黙って踵を返した。

歩き出す青年を、アリスは慌てておいかける

あとから考えれば、なぜ一本しかない道をはずれたのか。なぜ、追いかけようと思ったのか、わからない

それでも、あのとき、青年を追いかけた事実は・・・もう、消すことができないのだ。

「・・・あれ？」

ふと気づいたアリスは、周囲を見回した。

どれも、同じ木・木・木。

もしかして、迷子になってしまったのだろうか。

きゅ、とアリスはバスケットを抱えた。

少しだけ、心細い。でも、あの、金の髪の青年を探したかった。会いたい。あの、綺麗なひとに。

そのとき、ふと歌が聞こえた。

妙な歌だ・・・。

「あれ、女の子がいるよ」

「あれ、女の子がいるね」

容器な声に振り向くと、同じ顔が二つ。

にこにこ微笑んでいた。

「あの、貴方たちは・・・？」

驚くアリスに、まだ歳若い少年二人は、ずいっと一歩進み寄る。

「僕は、ドルダム」

「僕は、ドルディ」

「ダムって呼んでよ」

「僕は、ディだよ」

「・・・双子なのね」

「うんそう」

「双子だよ」

えへへ、と笑うと、ドルダムとドルディはアリスに抱きついた。

「きゃっ」

「ねえ、お姉さん。一緒に遊ぼう？」

「ね、お姉ちゃん。一緒に遊ぼう？」

「今は、駄目よ。私、金髪の男の人を探しているの」

え？と少年二人は目を瞬いた。

「お姉さんの、知り合い？」

「お姉ちゃんの、恋人？」

「ううん、知らないひと。ダムくんとディくん、知らない？」

知らないーい、と二人は声を合わせて首を横に振る。

「遊ぼうよ」

「遊んでよ」

「また、今度ね」

「ごめんね、と誤ると、双子がむう、膨れる。

「やだやだ、遊ぶう」

「遊ぶのお」

困ったアリスは、よしよしと双子の頭をなでた。

「ねえ、後で遊ぼう？ごめんね、ダム、ディ」

膨れていた二人だが、ふとディが顔をあげた。

「じゃあ、金の髪のひとつが見つかったら、遊んでくれる？」

ダムも、ゆっくりと顔をあげる。

「だったら、知ってるかもしれない人、教えてあげる」

「えっ、教えてほしい・・・」

「じゃあ、あとで絶対遊んでね」

「約束だよ、お姉ちゃん」

にっこりと笑う双子に、アリスも笑った。

「そうだ、お姉さん名前なんていうの？」

「うん、お姉ちゃんの名前しりたい！」

「私は、アリスよ。神葉ありす」

え、と双子は目を見張るのがわかった。

「「本名??」」

声を合わせる双子に、アリスは微笑んだ。

自分でも少し変わった名前だと思っけれど、本名なのだから仕方ない。

ちなみに、平仮名で「ありす」と書く。

「可愛い名前だね」

「うん、可愛いね」

「ありがとう」

アリスは、それから絶対にあとで遊ぶから、という約束をして、金の髪の青年について尋ねた。

「多分、蒼がしってるよ」

「そうだね、蒼なら知ってるよ」

ああ？

アリスは、少し首をかしげた。

すると、双子は軽やかに歌い始めた。

「この森を、もっと真っ直ぐ行くんだよ」

「そしたら、お花畑にでるよ」

「そこに、蒼はいる」

「蒼は、物知りだ」

「ありす、君はどうだろう？」

「受け入れて、もらえるかな？」

「またね、ありす」

「またね、ありす」

「あとで、遊ぼう」

歌いながら、双子はじゃあねと走って行ってしまった。

待って、と後を追おうと試みるが、既に森のどこかへ姿を消してしまっただようで、すぐさまシンとした沈黙がおりた。

「こっち、かな・・・」

アリスは、双子は示した方角へ向かい、歩くことにした。
そのとき、ふと思っただ。

あの子たち、日本人？

ここで、引き返すべきだったのだろう。

けれども、アリスは先へと進みだした。

1、双子少年（後書き）

連載です。まだ続きますが、宜しく願います。
感想などいただけると嬉しいです。

2、ほのぼの青年

だんだんと、森の奥へと進むアリス。

道などなく、山道ともいう草木が生い茂る場所をただ進んでいく。けれども、中々花畑には着かない。

アリスは、一度立ち止まり後ろを振り返った。

もしかして、真っ直ぐ歩いてないのかもしれない。横にそれてしまっているかも・・・。

それでもアリスは自分を信じることにして、歩くことにした。そして、願いが通じたのか。

ふと、甘い香りが花をくすぐったかと思うと、森が抜けて広い花畑に出た。

「わぁ・・・」

一面が、赤・黄・青・紫などの虹色をしていた・・・と思われる、場所だった。

つまり、以前はさぞ美しかったであろう、花畑。今は見る影もなく、あとこちで萎れていたり、枯れていたたり。

「可哀想・・・」

お花畑を横断しながら、アリスは花たちの姿の胸が痛む。

かつては美しかったであろう花畑は、無残な姿となっており、このまま枯れてなくなってしまうのも時間の問題ではないだろうか。

アリスは、ハッと目的を思い出した。

そうだ、金髪の男を探すために、蒼というひとを探していたのだ。
った。

きよろきよろと辺りを見回すが、枯れた花たちばかりで人の姿などない。

ずっと歩きつぱなしで疲れていたが、それでもアリスは広い花畑を歩き続けた。

実際、森がいきなり開けて広大な花畑があるなど、不可解この上ないが、アリスは蒼を探すことに必死なのと、目の前の悲惨な状況にすっかり失念していた。

前方には高い山があり、花畑の向こうにはひとつだけ家が見える。この森の奥にある開けた場所は随分と広く、花畑を過ぎても、どこまでもどこまでも続いていた。

「あら・・・あそこかな？」

花畑を過ぎたところに、小さな家があった。

先ほど、花畑から見えた、あの家だ。

あそこにいるのかもしれない。

アリスは、小さな家へと駆け寄った。

さすがに歩き続けで、少し息が上がってきていた。

「すみませんー」

トントン、とドアをノックする。
が。

「留守、かな」

なんとなく周辺を確認してみると、煙突から煙が出ているのが見えた。

「誰か、いるよね・・・多分・・・え？」

もう一度きよろきよろと辺りを見たアリスは、ドアの下にバスケットがあることに気づいた。そして、よくよく見るとドアの下部に、更に小さなドアがついている。

アリスはしゃがむと、小さなドアノブを回してみた。

カチャ、と小さなドアは開く。

「開いた・・・でも、20センチくらいしかない」
「どうやってこのドアから入るのだろう？」

「このバスケットも、どうして・・・」

バスケットには、書置きの紙がおいてあった。

「えと・・・“このクッキーを食べれば、小さくなれます？”」

身体が、だろうか。だとすると、この扉から入ることができる。

「・・・ちよつと怪しいけど」

物は試した。

少しだけ、齧ってみよう。

「あ、おいしい」

お腹もすいていたし、一口食べたクッキーはアリスの口の中ですぐに無くなった。

折角だし、もう一口、と口をあけたとき。

「・・・え？」

むくむくむく、と身体がどんどん縮んでいく。

「嘘・・・」

なんと、アリスは身長１メートルほどまで縮んでしまっていた。

「・・・凄い」

もう少し縮めば、小さなドアから入れる。

アリスは、もう少しだけクッキーを齧った。

すると、丁度ドアを通れるほどまで身体が縮小した。

アリスは、残りのクッキーをポケットにしまつと、小さなドアから家へと入っていった。

「こんにちはー」

ひょこつと顔を出して、中を覗き見た。

だが、どれも巨大でよくわからない。

と、思っていると・・・むくむくむく、と身体が大きくなりはじめた。

と思うと、すぐに元の大きさに戻つたようだ。視線が、いつもと同じところにあつた。

アリスは、改めて周辺をみた。

「わぁ、可愛い」

部屋の中は、とても暖かな雰囲気が漂っていた。

キッチンではこぼこぼと鍋が音をたてており、傍には小さなリビングがあつた。リビングでは丸くて赤い机がひとつ、小さな椅子が３つ。

アリスは、失礼しますーと言って中へと身体を滑り込ませた。

「わぁ、何をつくってるのかな」

台所へと行くと、オーブンで何かが膨らんでいた。ケーキだろうか？とてもいいにおいがする。

「蒼さん、いますかー？」

アリスは、少し声を張り上げた。

見当たる範囲には誰もいないし返事もない。

けれど、この部屋以外に部屋はないようだし、外から見た感じ小さな家だったので、二階もなさそう。

どうやら、本当に誰もいないようだ。

「あれ・・・」

赤い机の上に、小さな箱があった。

その箱から、オーブンから漂う匂いに負けず劣らずおいしそうなにおいがする。

「・・・なんだろ」

覗きこむと、そこには小さなパンケーキがあった。

一口さいずのそれは、可愛いトッピングがしており、空腹なアリスにとっては涎が止まらない。

「食べたい・・・」

けれど、ここは他人の家。勝手に入っただけでなく、お菓子まで食べたなら絶対に犯罪だ。

「……でも」

凄く、いいにおいがする。食べたい。

「……一口、だけ」

空腹の誘惑と甘い香りには勝てず、ちよつとだけと言ひ聞かせてひとつ食べた。

予想よりはるかに美味しく、至福のときを過ごしたアリスだが・
それは、一時の幸せに過ぎなかった。

身体の異変に気づいたのは、それからすぐだった。

むくむくむく。

「きゃっ」

徐々に身体が大きくなり……それは、天井にぶつかるまで止まらなかった。

丁度天井のところで腰を曲げ、腕は窓から突き出した状態となり・
……一瞬にしてぎゅうぎゅう詰まってしまったアリスは、己の軽薄さを後悔した。

「あれは……大きくなるパンケーキだったのね」

しょぼん、と呟いたときだった。

「あれ？お客さんかな」

青年の声が、した。

どうやら家の外のように、アリスは視線をめぐらせるもその姿を見ることができない。

「あの、助けてもらえますか？パンケーキ食べちゃったの。ごめん

なさい」

「ああ、パンケーキか。あれは永遠に効くようにつくったから、勝手には元にもどらないよ」

「えっ」

どうしよう

「泣かないで。机の上に、もうひとつクッキーの箱があったでしょう？」

声に導かれるように、部屋の中の机を見た。

「何もないけど。パンケーキしか・・・あ、机の下に箱がある」

「ああ、それだよ。そのクッキーをお食べ。元に戻る」

アリスは、促されるままクッキーを一枚指につまんだ。小さなソレは掴みにくかったが、それでも必死に持って口へと放りこんだ。

「・・・やっぱり、美味しい」

と、思っていると、すぐに身体が縮みだした。

元の標準サイズとなり、アリスはほっと一息つく。

「元に戻ったね、よかったよかった」

かちや、と鍵穴が動き、小さい方ではない、標準サイズの扉が開いた。

現れたのは、鍵をもった一人の青年だった。

けれども、森で見た絶世美貌の青年とは違う。むしろ、対照的だった。

眼は鋭くなく、優しげに細められていて。髪は金の長髪ではなく、茶色の短髪。背は高いが、ほのぼのとした雰囲気漂っている。

「あの、ごめんなさい。ありがとう」

「いえいえ、どういたしまして。そしていらっしやい、お客さんなんて久しぶりだ」

につこりと微笑む青年に、アリスも微笑んだ。

「あなたが、あの、蒼さん・・・？」

「違うよ。私は、バロヴィルク。この家に住んでる、料理好きなお兄さん。バロでいいよ、呼びにくいだろう？」

「バロ、さん。あの、突然なんですけど、蒼さんという方ご存知ではないですか？」

「アオ、とはアイリオのことかな。つまり、芋虫」

「いもむし！？」

「彼は、物知りなひとでね。でも、危ないよ。彼は変わり者だし、容赦がない。もしかすると、女王に突き出されるかもしれないよ」

「・・・女王さま？」

さっぱり意味がわからない。そもそも、芋虫って？？

「今ね、この国は女王陛下の支配下にあるんだよ。花畑も、枯らされた。湖も、干上がった。城以外は曇りの日が増えて、森は歪みあちらと時折繋がるようになった」

「??？」

「ああ、？マークを浮かべて・・・わかりにくかったかな。けれど、女王陛下を知らないなんて、君は珍しいね。純粹なのかな」

「それで、あの・・・芋虫って？」

「芋虫は、アイリオのこと。そういう種族なんだよ。会いたいのなら、案内するけれど・・・気に入られるかは、保障できないな」

苦笑されて、アリスは少し考えた。

もし、怒らせて、その女王陛下というひとに突き出されたらどうしよう。聞く限り、怖い人ようだし。

「ちよっと怖いけど、お願いします。アオさんに、会いたいです！」

アリスは思い切って言うと、バロは微笑んで、じゃあ行こうかと手を差し出した。

2、ほのぼの青年（後書き）

二話目です。

読んで下さり、ありがとうございました。v

3、渋いおじさま

なぜか、きゅ、と手を繋いで花畑を再び戻る。

けれども途中で右へと曲がり、そのままずっと進み続けると・・・そこには、大きなキノコがあつた。

「わぁ…大きいキノコ」

おお、と感嘆の声をあげるアリスに、バロヴィルクはくすくすと笑った。

「確かに、大きいけど…君、面白いね」

「え、そ、そうですか？」

ここでは、普通なのかな

考えて、ふと思う。

《ここ》って？

既に、自分の中で、この世界は日本ではないと思っていることに気づく。

「そういえば、君、名前は？」

「あ、はい、私、アリスって言います」

と、名前を名乗った、そのとき、だった。

「アリス、だと？」

厳かな、声がした。

見れば、いつの間にか巨大キノコにもたれかかるようにして、厳しい印象の男が立っていた。

白い髪は長く、頭上で結い上げており、眼は切れ長で鋭い。

瞳の色は薄い青で、感情のない表情から、その眼はまるでガラス

玉のような印象をつけた。

歳は、40弱ほどだろうか？

青を基調とした少し変わった衣類が、とてもよく似合っていた。

「あの、あなたが蒼さん…？」

アリスが戸惑いがちに声をかけると、男は軽く眉をひそめた。

「あのガキどもから聞いたのか」

「あ、そっか。アイリオをアオって呼ぶのか彼らしかいないものね」
バロヴィルクがくすくすと笑う。

アリスは、ガキというのがダムとデイのことだというのがわかった。どうやら彼らと、知り合いのようだ。

「彼女ね、君を探してたんだよ。ね？」

「あ、はいっ、あの、金の髪の青年を探してるんです、ご存知ないですか？」

軽く首を傾げるアリスに、アイリオは少し考えたのち、再び眉をひそめた。

怒らせたかな…

不安になるアリスの肩に、手が置かれた。

見上げると、バロヴィルクのものだ。

「大丈夫だよ、僕が守ってあげる」

微笑むバロヴィルクの笑みに、アリスは緊張が少しずつほぐれていくのを感じた。

「…知らない」

キリ、とアイリオはアリスを睨んだ。

「さっさと自分の世界に帰れ」

そして、踵を返して歩いていく…。

「あ、蒼さんっ」

後を追おうと、走り出すアリス。
だが、走ることは叶わず、一歩進んだところで腕に、激痛が走った。

見ると、先ほどまでの優しげな表情とは打って変わった、厳しい面持ちのバルヴィルクがアリスの腕を掴んでいる。

「君…他の、世界から来たの？」

その表情は、とても真剣で。

アリスは、硬直したように動けないでいた。

怖い

なに？

本能的に、逃げなければならないと直感した。

「ねえ、君本当に…他の世界から来たの？アリス…」
「ち、ちがう…」

咄嗟に、嘘をついた。

正直に言つては、いけない気がした。

「なんだ…そうだよな」
途端に、バルヴィルクは笑みになる。

「ごめんね、痛かった？」

「だい、じょうぶです」

「そっか」

微笑んで、掴んだ腕を優しくなでってくれるバロヴィルク。けれど、アリスにはもう、その手が暖かいとは思えなくなっていた。むしろ、ただ強くこすられているようにさえ感じて。

思わず、手を振り払おうとしたとき。

「あれ、アイリオ…どうしたの？」

バロヴィルクの声に、アリスは顔を上げた。見ると、キノコの横にアイリオが立っていた。

「珍しい、戻ってきたんだ」

蒼白になっているだろうアリスの顔を見て、アイリオが顔をしかめる。

そして、厳かな声音で言った。

「今、この世界は女王陛下に支配されている」

「それ、僕も話したよ？」

「なぜ、支配されたかわかるか？もう、支配されて20年近く経つ」

アイリオは、バロヴィルクの言葉を無視して話を続ける。

アリスは意味がわからなくて、首を横にふった。

「陛下はお心を、病んでおられるからだ」

「どういう、ことだろう？」

アリスが聞こうと口を開いた丁度そのとき。

「それは、仕方がないよアイリオ」

バロヴィルクが、苦笑して言った。

「だって、大切なものを臣下に奪われたんだから」

誰だって、大切なものを奪われたら嫌じゃないか、と陛下を哀れ

むバロヴィルク。

アリスは、そつと尋ねた。

「たいせつな、ものって何ですか？」

「さあ、わからない。けれど、皆言ってる。誰が言い出したのかはわからないけれど、大切なものが盗まれたって。そしてその大切なものは、むここの世界にあるって」

先ほどの真剣な表情は、あちらの世界、という言葉に共通点を見たからだったのか。

「くだらん、噂だ。信じるな」

「でも、皆言ってるんだよ？その”大切なもの”を陛下にお返しすれば、治安はよくなるって。また、昔の平和な国が戻ってくるって」
だから、皆探してる。少しでも、あちらの世界に関係するものは、全部陛下に献上するんだ。

そう言つて、バロヴィルクは笑った。

全部

その言葉に、アリスは益々青くなった。

つまり、全部とはアリス自身も含まれているということ・・・なのだろう。

「それで？金の髪の男を探して、どうするつもりだ？」

呆然としていたアリスはアイリオの言葉にハッと我に返った。

「あ…えと、なんだか気になって」

けれど。

もしかしたら、アイリオの言う通り、もう自分の世界に帰った方

が いい の か も し れ な い 。

このままだと、まずいことになるのかも。

「ふふ、惚れたんだ？そのひとに」

くすくす笑うバロヴィルク。

「じゃあ、探してあげよつか。一緒に、探そう」

「え？」

「暇だし、いいよ。僕も、陛下に献上する向こうの世界のものを、探したいし」

「…ありがとうございます」

どうしよう、と思った。

そのとき、ふとあの金の髪 of 青年が脳裏に浮かんだ。

やっぱり、会いたい。

あの青年を、探したい。

なぜそう思うのは自分ではわからなかったが、たとえ危険であってもあの青年に会いたかった。

まさか、本当に惚れたのだろうか。

「…ならば、大きな木の所へ行くといい。茶会が開かれているだろうから、すぐわかるだろう」

アイリオが、言った。

「珍しいね。アイリオが助言するなんて」

「帽子屋ならば、お前を助けてくれるだろう」

「あ、また無視した…僕泣いちゃうよ？」

帽子屋？

アリスは、その名前に胸中首をかしげた。
変わった名前だ。

「あの、ありがとうございます……」

アリスが御礼を言っていると、アイリオは一度だけ真っ直ぐアリスを見た。

「……幸運を、祈っている」

呟くと、アイリオは再び踵を返し、今度こそどこかへと消えていった。

アリスはその背中を、見えなくなるまで見送った。

4、ナルシスト&うさぎ

「ところで、大きな木ってどの大きな木なんだろ」

とぼとぼとバロヴィルクと歩きつつ、アリスは呟いた。

「大きな木は大きな木だよ。アリスは、知らないのかな」

「大きな木っていう、名前なの？」

巨大な木という意味ではなく。

「そうだよ。大きな木は、帽子屋の家の庭にあるんだ」

丁寧に合わせてくれて、バロヴィルクは持ち前の笑みをこちらへと向ける。

アリスはあいまいに笑い返し、道を急いだ。

もし

もしもアリスがあちらの人だと知れば、バロヴィルクは間違いなくアリスを女王への献上品とするだろう。

女王のことは、よく知らない。

けれど。

それを思うと、恐ろしかった。

「帽子屋はね、少し変わってるんだ」

バロヴィルクは、ふと思いついたように話し出した。

「でも、傍にうさぎがいるから大丈夫だと思うけど。もしかしたら、君に失礼なことを言うかもしれない」

「あ、いえ、そんな…別に」

「ふふ、アリスは優しいね」

ぎゅ、とバロヴィルクはアリスの手を握り、うきうきと歩く。
微笑まれて、思わずアリスは赤くなった。

然程美しいというわけではないが、他者を安堵させる雰囲気をも
つバロヴィルク。

先ほどのことがなければ、アリスは一瞬でバロヴィルクに惚れて
いたかもしれない。

花畑を抜けて、丘を越えて…アリスは、歩いた。
すると、遠方に巨大な木が見えた。30メートルほどの高さだろ
うか。

見たこともない木だ。

「あれが…大きな木？」

「そう、あそこに帽子屋がいるんだ」

アリスは一度深呼吸をして、それから歩調を速めた。

たどり着いたそこには、大きな木が一本あった。

幹の部分がぐにやりと曲がっており、テーブルになっている。木
には梯子がかけてられており、梯子をたどるように上を見上げると、
小さな穴が空いていた。

どうやら木の内部は家屋になっているようだ。

テーブルの上にはいっぱいの時計が散乱しており、隅の方でシル

クハットの帽子を被った男が一人、カップに紅茶を注いでいた。長い白髪の、男だった。長い髪は腰まであり、束ねずに垂らしている。紅茶を注ぐ仕草は優雅で、動作のひとつひとつが美しい。

ぼう、と一瞬見惚れてしまつて、慌てて我に帰る。

「こんにちは。久しぶりだね、帽子屋」

バロヴィルクが声をかけると、帽子屋と呼ばれた白髪の男は顔をあげた。

そして、につこりと満面の笑みを浮かべ……こちらへ、歩み寄ってきた。

「やあ、バロじゃないか！久しぶりだね、どうしたんだい？」

「うん、実は……」

「それよりも！一緒に祝おうじゃないか、おめでたい日なんだから！」

「……僕、今日は無視され」

「さあ、お嬢さんもどうぞ！椅子に座つて、はい紅茶。ああ、レモンの方がいいかな？それともアップル？」

帽子屋は素早い動きで椅子をひくと、アリスを座らせて目の前にお茶を出した。

ついでといったようにバロヴィルクの前にも紅茶を置き、ドン、とアリスの横へ椅子を置いて自らも座る。

どうしようと迷っていると、帽子屋はしょぼんと少しだけ残念な表情をする。

「おや、紅茶はお嫌いかな？お菓子もあるよ、どうぞしょぼんとしたのは、一瞬だけ。」

すぐに満面の笑みに戻り、お菓子をぐいぐいと勧めてくる。

「あ、あの…ありがとう」

どうするべきなのかわからず、とりあえず御礼を言った。ぱああ、と帽子屋は満面の笑みになり、うんうんとひとりで頷いた。

「いい子だね、君は！今日はめでたいんだ、無礼講だよ！」

「いつも、だろう？」

バロヴィルクが出された紅茶をすすりつつ、呆れたように言った。

「そうともさ！毎日がめでたいんだ、祝うべきだ！」

今にも立ち上がって演説をはじめそうな勢いの帽子屋に、アリスは圧倒される。

ふと、バロヴィルクを見ると、少し機嫌が悪そうだ。

「あ、あの…」

気になり声をかけると、バロは苦笑した。

「こいつは、いつも毎日こうなんだ。もう20年近くだよ。女王陛下が女王になったときから、ずっと。世界が減びそうなのに、僕としてはあまり愉快ではないね」

毎日？

20年近くも、毎日祝っているなんて。

何をそんなに、祝っているんだろう？

そんなことを考えているうちに、お菓子が目の前に置かれた。色とりどりの小さなプチケーキたちが、アリスを誘惑する。

「さあ、召し上がれ！女の子はこういったケーキが好きだろう？遠

慮せず、どうぞ、そして一緒に祝おう！」

ぐう、とアリスのお腹になる。

よく考えれば、パンケーキ一口以来にも食べていない。

しかも、すごく甘い匂いがする・・・おいしそうだ。

「大丈夫だよ、食べても」

戸惑うアリスに、バロヴィルクが言った。

「帽子屋の出すお茶菓子は美味しいから」

「あの、じゃあ、いただきます」

フォークやスプーンが無いか探してみたが見当たらず、手でつまんで口に入れた。

「〜美味しい！」

「はは、それはよかった！！どんどん召し上げ、紅茶はストレートかな？それともミルク？」

帽子屋はアリスの返事を待たずに、レモンにアップル、ミルク、ストレート、そしてハーブティまでカップに注いでは、置いていく。紅茶がなみなみと注がれたカップが、アリスの前にどんどん置かれていき・・・アリスは、慌てて声を張り上げる。

「あの、それくらいで十分です！」

こんなに飲めるはずがない。

というか、カップで目の前が埋め尽くされていく。

「遠慮はいらない、楽しみたまえ！！」

戸惑うアリスに、帽子屋は遠慮なくカップを置いていく。いくつめかのカップを、置いたときだった。

「やめろ」

少女の、可愛い声がした。
ぴた、と帽子屋が止まる。

「おや、レフィ。起きたのかい？ならば君も、これから楽しいお茶会のはじまりだ！」

「黙れ」

可愛い声が、低く震える。

声は、木の上からした。帽子屋も木を見上げて、話をしているようだ。

「レフィリアは、うさぎなんだよ」

バロヴィルクが、こっそり耳打ちしてくれる。

うさぎ？

「貴様ははしやぎすぎだ。脳天勝ち割るぞ」

「あはは！手厳しいなレフィは！紅茶でも飲んで談話しようではないか！そして祝おう、今日という日…」

ガゴ、という音がして。

帽子屋の頭部に時計がクリーンヒットした。
ボタン、とそのまま帽子屋は後ろに倒れる。

打ち所、大丈夫だろうか。

帽子屋・・・動かないのだけれど。

木の、丁度梯子が掛かっている先。
穴が開いている、その中から…。
ひよこ、と小さい何かが顔をだした。

「おや、客人か。珍しい」

それは呟くと、梯子を伝って降りてきて…アリスの隣、帽子屋が座っていたところにちょこんと座った。

それは、少女だった。幼女といったほうがいいかもしれないほど、幼い女の子。

普通の2歳ほどの少女なのだが…なんと、頭部に二本の長いうさ耳が生えていた。

確かに、うさぎだわ

バロヴィルクの言ったとおりだ、とアリスは一人納得した。

「痛たた、酷いなレフィは。私が美しいのはわかるけれど、そこまですることはないよ！さあ、仕切りなおしだ。お茶会をはじめよう！」

「うるさい」

少女の言葉など聴いていないというように、帽子屋は、一人でお茶会の続きを始めた。

アリスの視界の端で、一人くると踊りだしている。

少女は勿論、バロヴィルクも帽子屋を見てみぬふり…少し、可哀想だ。

アリスは、ちら、と隣に座るレフィリアを見つめて…眼が合った。

「レフィリアだ、宜しく」

「よ、宜しく願います」

ふ、と笑うレフィリア。

「ところで、何用か？」

尋ねるレフィリアに、アリスは頷いた。

そういえば、まだ用件さえ伝えていなかった。

帽子屋に、圧倒されて。

バロヴィルクが、そつとアリスに言ってくれる。

「うさぎに話すといい。彼女は、帽子屋よりよほどまともだからね」
「まとも、という言葉に、アリスはちらりと帽子屋を見て・・・目をそらした。」

まだ、くるくると回っている。

「あの、実は蒼：アイリオさんが、ここに来れば、帽子屋さんが力になってくれるから、と」

「アイリオが？ふふ、懐かしい名前だ！」

帽子屋が、会話に乱入するようにはいつてきた。くるくると回転しながら、紅茶を注いでいる。

だが、そんな帽子屋にはおかまいなしに、レフィリアは話を進めた。

「どのような事情じゃ？」

「えと、あの、金の髪の青年を追いかけているんですけど…」

その瞬間、ぴたりと帽子屋が止まった。

その変わりように、アリスは一瞬ドキリとする。

「金の髪の青年、か。わたしは知らぬが、帽子屋、お前知っておるな」

レフィリアが、動きを止めた帽子屋を、ちらりと見た。

帽子屋は変わらず不敵に笑ってるが、先ほどまでの押しと激しさはない。

「知っているよ。トランプのナイトだ」

「陛下のかい!?!」

バロヴィルクが、立ち上がった。

その勢いに、アリスは驚く。

「そうだ、ハートの女王側近である、トランプのナイト。金の髪の青年といえば、彼たちだけだからね」

「凄い…陛下の側近を見たなんて！いいな、僕も一度拝見したい…さぞ美しい方なのだろうね」

興奮気味のバロヴィルク。

先ほどとは反対に、今度は帽子屋が不愉快そうに眉をひそめている。

今までの愉快さなど、微塵もない、不愉快まるだしの表情に、アリスは一瞬、背筋に冷たいものが走った。
もしかして。

金の髪の青年の話は、あまりしてはいけなかったのか。

「…ふむ」

レフィリアは頷くと、ちらりとアリスを見た。

「して？そなたは、何がしたいのだ？」

「え…、あの、青年に、会いたい…なつて」

「惚れたか？…女王の配下のものとなるとやっかいじゃな」

ふと、何かを思い出したように、レフィリアは立ち上がった。

「バロ、こっちへ来い」

そして、バロヴィルクを手招きした。

「家に、そなたの探していた、あちらからきたヘンテコなモノがあったはずじゃ」

「ほんとうに！？どれだい？」

バロヴィルクは嬉しげに立ち上がると、レフィリアについて梯子を登っていった。

突然のことに呆然とするアリスをレフィリアは梯子からちらりと見下ろし、帽子屋を見て…もう一度アリスを見た。

そして、木の中へとバロヴィルクと共に入っていった。

「レフィは気がきくからね、二人きりにしてくれたんだよ！」

帽子屋の二人で落ち着かないアリスに対し、帽子屋は嬉しそうに告げた。

先ほどの、不愉快な表情は、消えている。

そういえば…バロヴィルクと帽子屋は、女王に関してはあまり意見が合わないように思えた。

アリスにはまだよく、わからないが。

そもそも、女王という人物さえ、よく知らない。

「けれど。君は、本当に金の髪の青年を見たのかい？あれは、滅多に女王の傍を離れないはずなのだけれど……」

「でも、あの、森の中で見かけて……」

森、という言葉に、帽子屋は首をかしげた。

「なぜ、そんなところに……？」

しん、と辺りが静まり、帽子屋は考える仕草のまま、動かない。黙ってしまった帽子屋に、アリスは居心地が悪くて何気なくテールを見回した。

あちこちに時計が置かれていて、ごちゃごちゃしている。

お茶にケーキ、クラッカーらしきものの残骸まである。

「……あの、何を祝っているんですか？」

ふと気になっていたことを、何気なく言ってみた。

帽子屋は満面の笑みになり、ふふんと不敵に笑った。

「それはね、おめでたいからだよ！」

「おめでたい……？女王陛下が、支配されて滅びそうなのに……？」

「それはそれ。これはこれ。私が祝っているのは、先の陛下のことだ」

帽子屋は、今までの笑みが演技であつたかのように、本当に嬉しそうに微笑んだ。

心から、幸せそうな笑みだ。

「もっと詳しく言えば、アリスの誕生だよ！ああ、アリス、彼女が生まれて20年近く。きっと今頃すすくと淑女に育っていることだろう！！こんなに素晴らしいことわない。毎日でも祝うべきだよ！」

アリス、という言葉に、アリスは背筋が凍るのを感じた。

4、ナルシスト&うさぎ（後書き）

少し長くなってしまいました。。。

5、アリス

「アリス、って・・・」

震える声で呟くと、帽子屋は微笑んで答えてくれる。

「アリス、っていうのは、前王の第一子のことだよ。つまり、皇女さま。今の女王の姪になるのかな」

ふふ、と笑う帽子屋。ほ、とアリスは安堵する。
なんだ。

一瞬、自分のことかと思ってしまった。
十代後半な自分なこともあり、歳も近い。
てつきり・・・。

「さて、それはそうと。君、名前は？わたしは、帽子屋。そう、名乗ることにしている」

そう言って、自分で煎れた紅茶を口へと運ぶ。

名乗ることにしている、ということは、偽名なのかな？なんて思ったが、あえて口にはしない。

きつと、理由があるのだろうか。それよりも。

名前を聞かれてしまったが、正直に答えてもいいのだろうか。

「私は・・・私は、アリス、です」

隠しても、仕方がない・・・だろう、と正直に告げた。バロヴィルクには、本名を名乗ってしまったし。

少しだけ迷ったが、はつきりと告げた。

案の定、ぴく、と帽子屋が動きを止める。

「アリス?...君、が？」

「あのつ、先ほど帽子屋さんが仰ったアリスさんとは、違いますっ。私、皇女じゃないし」

わたわたと告げるも、帽子屋はじつとアリスを見つめてくる。
正直、居心地が、悪い。

「そういえば...似てる、気がするね」

「ですからっ」

違う、と言いかけて。

「君だよ。間違いない。よく見れば、私にはわかる。...君は、あのアリスだ」

「...私はっ」

話くらい、聞いてくれてもいいじゃない。

違うって、言ってるのに。

泣きそうになって、やっと帽子屋がアリスに気づいて慌てだす。

「ああ、ごめん。泣かないで。...でも、君なんだよ。わたしには解るさ！そして、アイリオにも」

「.....え？」

なぜここに、アイリオさん？

「きつと、彼も、気づいたのだろうね。だから、わたしの元へと寄こした...けど。あまり、関心しないね」

そう言って、帽子屋は立ち上がった。

傍にあったポットから、ドボドボとカップへお茶を注ぐ。

「君は、帰るべきだ。元居た、世界へ。陛下に気づかれる前に、お帰り」

「どういう、意味ですか？よく、わからない…それに、わたし。皇女じゃないし…」

「君は、皇女なんだよ」

そう言って。

帽子屋は笑った。

「でも、陛下に気づかれてはいけないよ。気づかれては、君は命がないと思って間違いないだろう」

「・・・どうして」

と言いながらも、私は皇女じゃないのに、と心の中で呟く。

「女王は、恋をしてはならないからだ。その禁忌を犯し、先の陛下は君を産んだ。愛しい男との子を、ね。そしてあちらの世界へ愛の逃避行をしたんだよ！！」

「え・・・恋をしてはいけないんですか？」

「そうだよ。でも、恋をしたんだ。スペードのナイトに。そして、罪を犯した」

だから、君は今すぐに帰るべきだ。

言葉とは裏腹に、帽子屋の態度は飄々としている。

アリスは、眉を顰めて相手を見た。

だって、そんなの信じられるわけないから。

自分は、父と母の子で、ただのアリスだ。

けれど。

確かに、自分でももう帰るべきだと思う。

少し、この世界は怖い。

「でも・・・でも、帰るにしても、どうしたら。森が時折あちらと繋がるとかなんとか聞きましたけど」

この際、皇女がどうかは、置いという。

帰るには、どうするべきか。

一刻も早くここを出て、我が家へ帰りたい。

金の髪の青年は、気になるが・・・命に腹は変えられない。

「ふむ、確かに森は時折あちらと繋がるが。それは、あちらがこちらに繋がるのであって、一方通行だ！つまり、こちらからは帰れん！！ははっ」

「はっ！？」

え？

ええ？

初耳です。

「ど、どうすればいいの！？」

「それは勿論、こちらとあちらが繋がるところに行けばいいのだよ！頑張ってくれ」

「・・・」

あれ。

なんか、物凄い他人事。

まあ、他人事だろうが。
でも、でも。

「助けて、下さい！」

「嫌だ！！」

「・・・ですよね」

聞くとところによると、女王に目をつけられると大変なことになり
そうだし。

皇女であると信じているアリスと共に行動するのは、まずいのだ
ろう。

「だが、まあ、仕方がないな。このわたしと共に居たいと願うのは
自然なことだ」

「・・・。・・・へ？」

思わず、間抜けな声が出てしまった。
いきなりナニ言ってるの、このひと。

ちょっと待って、なんか伝わってない。

言いたいことがズレてる気がする。

「わたしは麗しいからっ！アイリオのようなオッサンよりも数倍も

ね ああ、皆まで言わなくてもわかつているよ。一目ぼれだろう！

「……」

「仕方が無いな。レンの娘となれば、わたしの娘も同然だ！！連れていってやろう、かの谷まで」

谷？

って……もしかして、その谷が、こちらがあちらに通じる場所？

いや、それよりも。

「レンって、パパ！？」

「そうだとも！親友だからね レンがスペードのナイト。私がダイヤのナイト。アイリオがクロバーのナイトだったんだよ」

ダイヤのナイトって……あまり聞きなれない言葉だな、とぼんやり思った。

と、いうか。

思考が、ついていかない。

レンって。

確かに、父の名前だが。

いやいや、あのおっとりした父に限って。

異世界に住人で、しかもその世界で禁忌の愛のちに今の世界へ駆け落ちしてきた、なんて。

言葉にしてみると、ありえないから。

本気で、ありえないから。

「まあ……レンなんてよくある名前だと思うし、それは置いといて、お聞きしたいことが」

「ああ、わたしのプロフィールを知りたいのだろう？わたしは帽子

屋。本名はひ・み・つv趣味はお茶会、好きなものは・・・君かな
v」

「かの谷、について知りたいんです。そこへ行けば、わたしは帰れるんですか？」

「・・・冷たいね、アリス。ここは、キャv照れちゃうわvvとか言ってくれると嬉しい」

「遠い場所なら、やはり準備も大変だと思っんです。それに、帽子屋さんにもあまりご迷惑かけられないし」

「・・・。冷たいね、本当に」

ふむ、と帽子屋が傍のバスケットに手を伸ばした。

「場所は・・・遠いよ、かなりね。夜の森を通らなきゃいけないし。それに、陛下の城の近くだしね。正直あまり城には近づきたくないんだけど」

帽子屋は、ポリポリとビスケットを食べながら言った。

「森には、アイツがいるし・・・」

「あいつ・・・って」

誰？

と聞こうとしたとき。

上から声がして、アリスは顔をあげた。

「アリスっ、見てこれ！あちらのものだよ」

バロヴィルクだ。

なにやら手に持っている。

「とつとと降りんか！」

「ぎゃっ、蹴らないで！落ちるから・・・うさぎ、痛いっ」

「誰がうさぎだ。レフィリアという名があるというに」

なにやら、レフィリアに頭を蹴られて、バロヴィルクが悶絶して
る。

仲・・・いいのかな？

「じゃあ、出立は明日の朝ってことで。今日は泊まっていくながい
あはは、と笑う帽子屋に、アリスはぺこりと頭を下げた。

「あ、ありがとうございます。すみません、なんか・・・」

「構わないさ。あ、そうそう。行くとき、アイリオを誘っていこう
か、無理やり引っ張っていこうとvvv」

うふふ、となにやら嬉しそうな帽子屋。

こうして。

出発も決まり、なにやら大変なことになったと思うアリスだが。

こんなときにも、思い出すのは。

あの、金の髪の青年のことだった。

5、アリス（後書き）

すみません、、。

大変遅くなりました（汗）

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2341d/>

森の国のアリス

2010年10月10日16時30分発行